

平成29年度の研究について

1 研究主題

主体的に活動する力を育む授業実践

～児童生徒の気付きや実感に基づいた学習評価を通して～（2年次／2年計画）

2 研究主題の設定理由

（1）研究の概要

本研究は、「児童生徒一人一人の気付きや実感に基づいた学習評価（学習状況の評価、指導の評価）を基に授業実践を進めていくことで、児童生徒は学習への関心や意欲が高まり、主体的に活動する力が付く」との研究仮説の基に実践している。研究主題にある「主体的に活動する力」は、本校キャリア教育の指標「地域とあゆむ い～なプラン」の4つの付けたい力、「生活する力」「人と関わる力」「考える力」「意欲をもって物事に向かう力」ととらえている。また、「気付きや実感に基づいた学習評価」は、教師の指導についての評価だけでなく、「分かる」「楽しい」「好き」「こうすればできる」などの児童生徒の思いに基づいた学習状況の評価に取り組んでいる。

研究主題の設定理由としては、これまでの学習活動において、児童生徒の選択場面や思考・判断場面が不十分であったことがあげられる。児童生徒が自分でやりたい活動を選んだり遊びにおいて関わりたい友達を選んだりするなどの活動場面の設定が足りなかったといえる。また、活動後の評価の場面において、児童生徒の「気付きや実感」と教師の「気付きや実感」との間に違いやズレが多く見られたこともあげられる。現場実習等では、「十分にできた」という生徒の評価と「まだまだ足りない」という教師の評価の間において、また、遊びの指導では、「一人でじっくり遊ぶのが楽しい」という児童の思いと、「児童同士が多く関わりをもった方がよい」という教師の思いの間において生じていたことなどがあげられる。

そのような違いやズレをなくしていくためには、目標設定や評価において、児童生徒と教師の両者が願う方向性等を十分に確認し合う（両者のベクトルの方向と長さを合わせる）ことが有効であると考えた。児童生徒に活動の目標等を分かりやすく提示し児童生徒と教師との間で課題等を共通理解することや、児童生徒の育ち等を評価する具体的な基準を設定し、教師間で指導方法や手立てを共通理解することなどを、授業の実践を通して取り組んでいきたい。

（2）昨年度の研究から

昨年度は、①学習評価（学習状況の評価、指導の評価）を基にした授業実践、②学部の実情等に応じた評価システムの構築に取り組んだ。

①は、「学習状況の評価」では、観点別学習状況の評価に基づく評価規準と評価基準の設定と評価を行った。単元設定時に活動ごとに観点別学習状況の評価の4観点「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」に基づき単元の評価規準を設定し、児童生徒個々の評価基準を設定した。そして、設定した個々の評価基準に基づき、授業後や単元終了時に評価を行った。授業の目標以外の児童生徒の様子や児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況については個人内評価を行った。「指導の評価」では、授業毎の評価を各学部の評価システムを活用して行なった。児

児童生徒個々の評価基準によって評価を行うとともに、児童生徒が「気付いた」「実感した」ときの様子や、できた・成功した（できなかった）場合の具体的な条件や手立て、支援の仕方などについて評価し授業改善を行った。

②は、小学部（遊びの指導）、中学部（作業学習）では、授業後に毎回VTRを用いたカンファレンスを行い授業改善に取り組んだ。高等部（生活単元学習、職業）では、教師間で情報を共有するツールとして「はたらくノート」を、教師・生徒・保護者間で情報を共有するためのツールとして「振り返りカード」を用いた授業づくりと授業改善に取り組んだ。

昨年度の課題として、評価規準の設定に多くの時間がかかること、設定後の評価で十分に活用できなかったことがあげられた。また、1時間毎の授業での個々の目標設定と評価は十分にできたが、単元毎・年間の目標設定と評価については不十分であり、児童生徒の成長を十分に把握できなかったことがあげられた。

（3）社会的要請から

新学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の三つの柱として、①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）、②理解していること、できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成）、③どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか（学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）があげられている。教育課程全体で、児童生徒にどういった力を育むのかという観点から教科等を越えた視点をもつこと、それぞれの教科等を学ぶことによって、どういった力が身に付くかを把握し、どのような力が不足しているのかについて丁寧に評価していくことが今後ますます求められることが考えられる。

また、主体的な力と学習評価については、中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）（2014年）」の中で、「これからの変化の激しい時代に対応していくには、『何を教えるのか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、『どのように学ぶか』という学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見や解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブラーニング」）や、そのための指導の方法を充実させていく必要がある。学びの成果として「どのような力が身に付いたか」に関する学習評価の在り方についても改善を図る必要がある。」とされている。

3 研究仮説

一人一人の気づきや実感に基づいた学習評価（学習状況の評価、指導の評価）を基に授業実践を進めていくことで、児童生徒は学習への関心や意欲が高まり、主体的に活動する力が付く。

4 研究の内容と方法

今年度の課題は、「単元毎・年間の目標の設定と評価」の取組について見直し、改善していくことである。昨年度構築した学部毎の評価システムの中に、「単元毎・年間の目標の設定と評価」を組み込みながら、授業実践と授業改善に取り組んでいく。

また、職員がそれぞれの授業改善に、来年度以降も継続的に取り組んでいけるように、できるだけ過度な負担感がなく日常的に取り組めるような評価システムを学部ごとに構築し、活用していくことが今年度の課題とされる。

学習評価（学習状況の評価、指導の評価）を基にした授業実践

①学習状況の評価

○観点別学習状況の評価に基づく評価規準の設定と評価

- ・年間指導計画（※資料 1）の書式の見直しを図り、年間指導計画の立案の際に、観点別学習状況の評価の4観点「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」に基づき単元の評価規準を設定し、単元毎に評価をする。

○児童生徒個々の目標の設定と評価

- ・「学習目標と評価」票（※資料 2）を活用し、年間目標、前期・後期目標、単元での目標、本時の目標等の設定について、目標の整合性を図り、単元毎に評価をする。

○個人内評価

- ・授業の目標以外の児童生徒の様子の評価、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価を行う。

②指導の評価

○評価システムの活用による授業改善

- ・個々の学習目標に基づいた評価を行うとともに、「分かる」「楽しい」「好き」「こうすればできる」などの児童生徒の「気づきや実感」の発信を、行動観察、エピソード記録などの様々な方法で受信し、学部毎の評価システムにより授業改善に生かしていく。
- ・中・長期的な視点から児童生徒の成長や変化をとらえられるように、毎時間の活動への評価だけでなく、単元毎、年間の目標への評価について、評価システムの中に組み込み評価する。
- ・児童生徒が「気付いた」「実感した」ときの様子や、できた・成功した（できなかった）場合の具体的な条件や有効な手立てなどについて記録する。

5 研究計画

【1年次】

- ①児童生徒の実態と照らし合わせて、評価の共有をはかりたい指導の形態等を選択して研究する。
- ②学部ごとの評価システムをつくり、学習評価を通しての授業実践を行う。

【2年次】

指導の形態や評価システムの在り方についての検討を通して授業実践を行い、1年次で明らかになった課題を改善する。

6 年間計画

期 日	全校に関わる研究会、研修等	備 考
4月17日(月)	拡大研究部会①	今年度の取組について
21日(金)	研究全体会①	//
6月2日(金)	学部研①	
7月3日(月)	学部研②	
8月24日(木)	校内研修会	秋田県教育庁特別支援教育課 指導主事 中村素子 氏
9月1日(金)	学部研③	
10月3日(火)	学部研④	
4日(水)	全校授業研究会①(高等部)	生活単元学習(進路)
11月1日(水)	学部研⑤	
9日(木)	全校授業研究会②(小学部)	遊びの指導(学部合同)
29日(水)	全校授業研究会③(中学部)	作業学習(リサイクル班)
12月1日(金)	学部研⑥	
11日(月)	拡大研究部会②	全校授業研究会後の各学部の 取組について
19日(火)	研究全体会②	//
1月22日(月)	学部研⑦	
2月1日(木)	学部研⑧	
14日(水)	拡大研究部会③	今年度の成果と課題、次年度 の方向性について
20日(火)	研究全体会③	//
3月5日(月)	学部研⑨	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 拡大研究部会～校長、教頭、学部主事、進路指導主事、研究部員 ・ 学部研究会～学部の計画に沿って実施する。また、学部内授業研究会を計画し、実施する。 		